



弥生時代の京都

はじめに

弥生時代は大陸からの様々な影響を受けて、大きく生活様式が変化した時代です。西日本では弥生時代の始まりとともに米づくりが本格化したことが予想されます。

京都府内では京丹後市はこいしほま函石浜遺跡、京都市ふかくさ深草遺跡や長岡京市くもみや雲宮遺跡など弥生土器研究の基礎資料が出土した遺跡もあります。

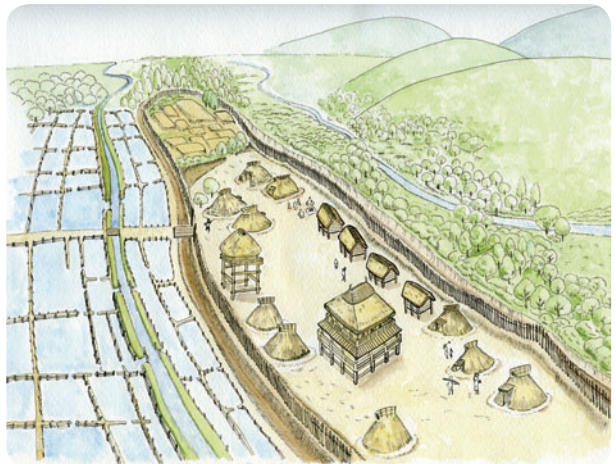
弥生時代は土器の変化や文化内容から、前期・中期・後期に分けられますが、始まりと終わりの年代については現在様々な意見があり決着を見ていません。

弥生時代の集落

京都府内で最も古い弥生時代人たちの生活の跡は、京都市しもとぼ下鳥羽遺跡、長岡京市雲宮遺跡で発見されています。

前期の遺跡には京丹後市おおぎだに扇谷遺跡や京丹後市とちゅうがおか途中ヶ丘遺跡、亀岡市おおた太田遺跡などが挙げられます。また、これらの集落の中には、平地につくられたものと、こうちせいしゅうらく高地性集落と呼ばれる丘陵上につくられたものがあります。

中期になると自然堤防上や河岸段丘上に大規模な遺跡がつくられるようになります。福知山かんのんじ観音寺遺跡、舞鶴市しだか志高遺跡、南丹市いけがみ八木町池上遺跡、長岡



弥生時代のムラの想像復原図

弥生時代の京都

京市^{こうたり}神足遺跡、久御山町市田^{いちださいとうぼう}齊当坊遺跡などでは広い範囲に遺構が分布しており、集落規模が大きかったことがうかがえます。

丹後地域では、与謝野町日吉^{ひよしがおか}ヶ丘遺跡や京丹後市^{なぐ}奈具・^{なぐおか}奈具岡遺跡など台地上につくられた大型集落が認められます。斜面の山側を削り込んで、その土を谷側に盛土することによって住居を造る集落が特徴的で、このような形態の集落は古墳時代まで続きます。

食物の生産

弥生時代に入ると本格的に各地で水田耕作が行われるようになります。



灌漑用の矢板が打ち込まれた溝（蔵ヶ崎遺跡）



稲株痕跡がのこる水田跡（内里八丁遺跡）

ます。

京都市京都大学構内遺跡では、前期の水田跡が見つかっています。与謝野町蔵^{くらがさき}ヶ崎遺跡からは、弥生時代中期の水^{やいた}路に矢板を打ち込んだ^{かんがいようすいろ}灌漑用水路と考えられる溝が見つかっています。また、八幡市^{うちさとほつちよう}内里八丁遺跡や京都市東土川^{ひがしつちかわ}遺跡では、小規模に区画された水田跡が多く見つかりました。

農耕に必要な道具は集落内で生産されていたようで、雲宮遺跡や東土川遺跡では木製農耕具とともにその未製品も発見されています。

弥生時代には稲作に注目が集まりますが、雲宮遺跡ではシカ・イノシシ（ブタ？）の骨が出土しており、縄文時代の主要な獲物である2種類の動物が継続して捕獲され食べられていたことがわかります。また、京丹後市の奈具谷遺跡^{なぐだに}では、弥生時代のトチの実を加工した施設が発見されており、弥生時代においても狩猟と植物採集は一定の割合で続けられていたことがわかりました。

道具の生産

弥生時代の土器は、器面に施される文様に変化はあるものの、縄文土器と比べると造形的に簡素な形態のものが多くなります。

弥生時代前期の土器の形態や模様は、全国的に大きな違いはありませんが、中期以降では地域ごとの特色がでてきます。京都府の北部と南部においても土器の形態や文様に差異が生じており、文化圏の違いとして認識できます。

弥生時代には金属器が大陸からもたらされました。向日市鶏冠井遺跡^{かいで}では銅鐸^{どうたく}の鑄型^{いがた}が出土し、青銅器を生産した形跡が認められます。隣接する長岡京市神足遺跡^{こうたり}（長岡京跡右京第807次調査）では銅剣が出土しています。また、京都府内には銅鐸が発見された遺跡が7か所あります。

鉄器^{てつき}が出土した遺跡としては、京丹後市奈具岡遺跡があります。

この遺跡では、玉作りに付随して鉄器が使われていました。分析により鉄素材は、朝鮮半島経由で中国からもたらされたことがわかりました。そのほか、鍛造^{たんぞう}鉄斧や鑄造^{ちゅうぞう}鉄斧、鉋^{やり}など多くの鉄器が出土していま



弥生中期の土器（池上遺跡）

弥生時代の京都



磨製石剣（市田斉当坊遺跡）

す。全国的に見ても京都北部のこの時期の鉄器の出土量は多く、大きな勢力を有していたと考えられます。

鉄器が用いられていましたが、弥生時代においても石器は主要な道具でした。

石器は大きく分けると打製石器と磨製石器に分け

られます。打製石器の多くは、サヌカイトと呼ばれる火山岩から作られており、石鏃・^{せきぞく}錐・石小刀・石剣などがあります。石材は香川県金山や奈良県二上山からもたらされました。磨製石器には、石剣・^{いしぼうちよう}石庖丁・石斧・石鏃などがあります。磨製石器の石材となる粘板岩については丹波地域を中心に多くの露頭があり、京都では磨製石器の割合が他地域に比べ多い傾向が見られます。

弥生時代の墓

弥生時代になると一定の空間を持った墓が出現します。墓の多くは「^{ほうけいしゆうこうぼ}方形周溝墓」と呼ばれるもので、四角く溝をめぐらせ、内側に



密集してつくられた方形周溝墓（下植野南遺跡）

墓穴を掘り、遺体を埋葬したものです。方形周溝墓は、南丹市池上遺跡、京都市東土川遺跡、大山崎町下^{しもうえのみなみ}植野南遺跡、久御山町市田斉当坊遺跡のように、溝を共有して連続的に築かれるものが一般的です。

北部では、弥生時代

前期から中期初頭には集落から離れた丘陵上に「だいじょうぼ台状墓」と呼ばれる墓が築かれます。中期になると、南部と同様に集落の近くに墓を築くようになります。このなかには方形周溝墓より大きな「ほうけいはりいしぼ方形貼石墓」と呼ばれる墳丘を石で装飾した墓が見られます。この貼石墓は、与謝野町てらおか寺岡遺跡や宮津市なんばの難波野遺跡などで見つかっています。後期からは再び集落から離れた丘陵上に台状墓を築きはじめ、鉄製品や玉類などの副葬品が納められています。



墳丘を石で装飾した墓（寺岡遺跡：与謝野町教育委員会提供）



大型の墳墓（赤坂今井墳墓）

やがて、北部では京丹後市赤坂今井墳墓あかさかいまいのような大型の墳墓が出現します。こうしたことから、丹後を中心に畿内中央部とは異なる独自の勢力が存在したものと考えられています。南部の後期の墓としては、木津川市きづしろやま木津城山遺跡で3基の台状墓から木棺墓14基が見つっていますが、木棺墓に大きな格差はありません。格差が顕著になるのはもう少し新しい時期である城陽市しばがはら芝ヶ原古墳が出現してからかもしれません。

（中川和哉）